

懷疑と告白

上 本論の背景

私は今此の文を先達て公にした人生觀上の自然主義を論ず(「近代文藝の研究」序)といふ一文の續きの積りで書く。併し何の必要があつて私に其の續きを書くのであらうか。ちよつと考へて見たい。

私に取つては無論斯うして書く文章が一の藝術である。従つて之れを書く因縁を考へるのは、やがて少くとも私一個の上で藝術發生の實情を研究することになる。即ち私の態度が依然として一の研究者といふ域内にあることをば免れない。一體何ぞ研究だの考へるのといふ事をやるのだらう。昔の懷疑者流は、判斷といふ事を拒絶すると同時に研究だの知識だの考へるだのといふ事を拒絶しようとした。従つて學問めいたことや書物めいたものをば遺さないのが多かつたといふ。成程之れも一理窟だが、併し今日の我々から言はずれば、一向に斯う言ひ切るのも矢張り矛盾である。第一それ

で事實我々の研究だの、考へるだの、判斷だのがばつたり息んで了へば申分は無い、が、さうは行かない。ソフキスツの後にソクラテース以下の哲學が起つたり、後の懷疑派についてプロテース以後近世に及ぶまでの大哲學が起つたりした以上、今日の我々が眼には、此等の事實が一方に立つて物を言ふ。そののみでなく私みづからの本心に振りかへつて見て、今のところまだ明白に研究とか考へるとかいふ事に根本の要求がある。事實上觸れることに必ず何等かの程度でそれを考へなければ不満足で氣がかりで仕方がないのだから、是非が無い。斯う思ふと、結局私みづからの根本要求の爲に研究考察をやるのである。是れをやらなければ自分に満足が出来ないからである。昔の學者が何らの、現代の誰々が斯うのと言ふのは、それこそたゞ自分の根本要求の後援を其處に、求めるに過ぎない。

自分の根本要求で、たゞ考へたいから考へると一種の道樂とも解せられるが、道樂と解せ

られるのは厭だ。厭な理由といふのは、道樂といふ語の中には考へても考へなくても、其の人の生活には無關係だからといふ意が籠る。斯う思はれるのが厭だからである。事實自分にとつては、考察といふ經過の無い觀念は、それを推し進めて次の實行過程に移すのが不安心である。色々の意味で不安心である。現に此の論文を書きつゝある間も、直に本文に入ればよいのに、不圖思ひついて、全體書くといひ考へるといふことからして極めてかゝらねば、跡の仕事は皆地ならしのしてない普請のやうなものぢやないかと考へ出す。さうなると是非何と此の問題を片づけて置かねば、氣がかりで跡が心地よく進まない。此のまゝ抛つて置いて、縦し自分は我慢しても世間から突つ込まれたら、忽ち自分の立場は崩れて了ふ。自衛の上から言つても是れではならないといふ氣になる。つまり私の實生活が阻碍せられるからである。斯う説明して来ると、茲までは事實の告白に過ぎない、極平凡な事實の告白に過ぎない。と同時に動かすべからざる眞實である。自分自身に生の爲に研究もすれば考へもする。けれどもちやうど男女の愛が子孫を遺すための方便として與へられた本能であると解説せられる如く、自愛本能の

一つとして現はれた、研究本能考察本能も、結局はそれで、漸次に天地人生の眞理を闡明させようといふ造化の計畫なのかも知れない。併し此所まで来るともう事實の告白でなくなる。事實の推斷である、哲學である。従つて其の通りかも知れないが又さうでないかも知れない。人さまざまの解説を容れ得る所以である。眞理の爲に研究するといふのと自分の爲に研究するといふのとは哲學と事實との相違である。私は茲で哲學は立てない、事實に止まる。

斯んなにして自分の生の爲に考究するものを何で私は文字に書きつけて世に公にするのだらう。通例世間の人が此の問題に答へるには一定の型がある。己れの所思を發表して眞理の研鑽に資する爲だとか、己れの發見した眞理を世に布いて他人と分け前する爲だとかいふ。つまり眞理の爲、世の爲といふのだ。そして史上の逸話などを引いて、誰々は自分の身を殺しても眞理は曲げなかつた、宣傳は已めなかつたといふ。成程それも一面の事實であるには相違ない。が、自分の眞理と思ひ込んだ事や、況して一旦それと發表した事が、軽々しく變更せられるものでないのは、必ずしも逸話の場合のみぢやない。其の人の事情境遇に應じて、皆それ

ぞれに自分を眞理に殉せしめざるを得ない複雑な理由を有して居る。例へば行きがかり上何と威嚇されても此處は前來の説を固持しなければ都合が悪いといふこともあらう。故で前説を離せば、自分の地位が亡びる、世間へ出す面目が無い、それを思ふと苦痛だ、寧ろ殺されても生きてくる苦痛よりは樂だといふやうな動機が随分多量に作用することはないか。斯うなれば實は眞理非眞理や救世濟民の問題ぢやなくて、自分の存在といふ問題になる。其の他是れに似た元素が幾らもあり、又、反對にたゞ眞理だと信ずるが爲にそれに愛着するやうな元素も幾通りかあつて、到底單一の動機で説明することの出来ないのが心作用の特色である。如何に單純に見える人でも、心の中の色彩は決して簡單なものではない。行ひに對しては油斷しても、心に對しては油斷の出来ないものと信ずる。人間を單一な動機で動いてるものとするのは、陳腐な人間觀である。

私は茲で現に此の論文を書くに至つた動機を數へて見ようと思ふ。一番直接には雑誌のため、是非とも九月號には何か書かなくちゃならぬ、若し書かなければ雑誌が困る、そしてその雑誌は自分乃至自分の親しい人々がやつてゐる

のだから、打ちやつて置く譯には行けない。是れだけ、動機が餘程強い要素になつてゐるのは疑ひない。つまり論文を書けば、此の論文たると他の論文たるとは問ふ所でないのである。又是れが別な雑誌の場合なら、自分が困るといふよりも、余が是非入用だからとか、編輯者に對する情實だとかいふものが重要な動機の一つになるだらう。何れにしても眞理のためとか研究のためとか世間のためとかいふ事とはかけ離れて全然自分の爲の動機である。此の動機が無かつたら事實私は此の論文を書かなかつたかも知れない。

それから今一つは何かしつかりした物を書いて、自分が論文壇に立つて居る地步を益々強くしなくてはならぬ、自己存在の地盤を築いて行く、少くとも現に有してゐる地步を脆弱にしてはならないといふ、自己的動機も加はつてゐるに相違ない。更にまた前に書いた論文の趣意が世間から誤解されたり、十分徹底しなかつたりする恐れで、是非あの跡を書き足したいと思ふ、何ぜならあのまゝでは自分の價値を傷けられる恐れがある。現に世間の批評の中などにさういふのが見えて、其のまゝほつて置けば自分の存在を弱め

るかも知れないからである。

以上の諸動機と類の違つたものと思はれるのは、此の論文に書く思想そのものを、初の内段々と心の中で熟させるに從ひ唯何となくそれを公にしたいやうな一種の傾向を覺える。勿論その中にすら一部はそれで世間の人を感服させたら愉快だらう、從つて早く發表して見たいといふ氣持が交らぬと言ひ得ないが、それ以外唯何となく其の感想を發散させなければ胸に滞りを覺えて氣持が悪い、古人の謂はゆる腹ふくるよといふ心地なのである。是れは感想といふものが凡て強まるにつれ自然に實現方面へ表面の途を求めて來る心理上の原則に應ずるものだらう。一つの科學的現象と見てよい。又これも強ち自分の爲とは見えない一動機として擧げると、例へば世間の人があんな間違つた事、偽りの事を本當と思つてゐる、見てゐるのがもどかしくて自分の説が出して見せたい、といふ氣持である。先づ言はゞ眞理を擁揚して世が救ひたい爲とも言ふのだから、併し斯う言ひ切ればもう誇張になる。實際の眞理状態はもつと漠然たるものである。偽妄に過られる他人が不憫でたまらぬといふ程強烈な慈悲本願で論文を書いた經驗は曾て無い。却つて此の動

機が強く明になればなる程、たゞ偏に自分の信ずる所を立て通さうといふ形になる。つまり眞理の爲世上の爲といふに近い氣持と、自分の主張だから擁護し擴張したいといふ氣持とのうべ合せたやうな動機である。或はこゝでうんと踏ん張つて、眞理のため世上のためといふ事一途に熱發するのが、即ち大文字を成す所以だと反駁せられはしないか知らん、とも思つて見るが、實際私には何うしても其處まで行けない。其自分を標準にして觀察するから、勢ひ世間で右の様な動機で大文字を製作すると公言する人々の多くはみんな己れを偽り若しくは誇張して夢を見てゐるのだと思はれない。自分を以て他を忖ると言はれても仕方がない。それが自分の現在の最高眞實である以上、自分以外に何で他人を忖度する目標があらう。斷るまでもなく、以上の諸事情は、動機論であつて、目的論ぢやない。目的は云々の眞理を説明して見ようといふ點に存する。別事である。さて斯んな風に敷へ上げて見ると、此の一論文を作るにすら、雜多な動機が雜多な比例で結合してゐる。そして其の不純粹な動機といふことが、私には已み難い本性のやうに考へられる。同時に、だから其れが結構だと讚美する

氣持もない。唯無闇と一方づいて、眞理のため天下國家の爲の一動機で仕事をしてゐるやうに言ひ做し觀做すものを疑ふ。若しそれが聖人なら、私は聖人の心事を疑ふことを禁じ得ない。それと共に人間が自利一點で仕事をしてゐると思はない。推しつめて解釋すれば矢張り自己の爲といふことになりさうな場合でも、直接動機としては他人の爲にも眞理其のものの爲に動かされる。要するに事實は以上述べたやうな複雑なものである。それを鉋で薪を割るやうに、荒つぽくつか二つに片をつけて了ふのは私の承服し得ない所である。此の論文が懷疑と告白といふ題目で私の人生に關する現在の考へを述べようとする、それだけは自明の事としても、述べて、さて何に以上の如く雜駁であるとすれば、此等の諸動機の凡てを是認するだけの統一目的が潜んでゐて、その力が我々をして書かざるを得ざらしめて呉れなければ困る。現在の心理状態を檢べれば前言つた通りの無統一な有様で、眞理の爲、世上の爲といふ氣持もあるが、それと反對にただ自分の爲といふ氣持もある。現状を告白して見ると、自分で恥かしいやうな、不愉快な感じ

がする。將來も是れでやつて行つて美しいものだらうか、不快不安だ。出来るなら單一な、あらゆる部分を満足させる解決がつけて貰ひたい。何時か何處かで一度は是非それをつけて置かないと、我々の生は一代ぐらくとして過ぎなくちやならぬ。それは苦痛だ。そこで斯んな考へ（の起る）に彼あか斯うかと考察に耽る。けれども遂に是れが最後の鐵案だといふものに行き當らない。此の論文を書く必要即ち根本目的はと問はれても、結局今の私は明確な答を與へ得ない。已むを得ぬからそれを催進した諸動機を漫然數へ上げて見る。あれも一理由、是れも一理由だといふ。そして其のあれと是れとの間の矛盾を思つていやな、不満足な感を残す。何とあして此等の矛盾した動機の奥に、凡てを是認して安心さす統一目的又は統一動機があつて欲しい。私は今斯んな背景の中で此の論文を書く。

中 現代の哲學も宗教も懷疑に生く

何う考へても、今日の自分等が眞に人生問題を取り扱ひ得る程度は、懷疑と告白の外に無いと思ふ。今迄の人は餘りに信じ過ぎた、他人

の思想を信じ過ぎたり、自分の思想を信じ過ぎたりした。或は信じて頼りすがるべき思想のあるのが一生の平和の爲には仕合せかも知れないが、時勢はそれを出来なくしてしまつた。早い話が近代の新聞紙の發達だけでも、儼に天下を凡ん人化し平等化させる力があるではないか。凡人化といひ平等化といふのが、實は人間をして眞の人間たらしめたのである。衆人を擧げて一種の自覺に導いたのである。聖人であらうが、英雄であらうが、人格の一面から見れば、路傍に客待をしてゐる車夫、足に鎖のついた囚人と少しも違つた事はない。隱微もあれば矯飾もあり、天真流露の美しさもある。偶像崇拜、英雄崇拜の時代が過ぎ去つて、人は皆平等の世となつた。所謂現實暴露だ。今日の新聞紙を一週間も讀んで居れば、天下に聖人だの英雄だのといふものは居なくなつて了ふ。勿論一藝一能に秀でた人は居るけれどもそれは全人格の上の英雄でも聖人でもなく、従つて崇拜などは思ひもつかぬことである。政治家としての伊藤氏、相撲取としての常陸山氏、俳優としての羽左衛門氏、皆一面に他に及ばぬ特技を有してゐると共に、一面は共通の人間たることを最も明白に見はしてゐる。是れが人間の真相であら

う。昔は新聞紙なども無かつた爲、キリストも孔子も馬鹿々々しい程人間離れのした偶像に飾り上げられた。現代ではそれが出来ない。斯んな世の中に立つて、我々は誰をたよりに自分の全生活を支配する問題を打ち任せよう。何處に一つ我々を全部服従させるに足る思想があるか。我々はたゞ現在の自分の心内に振り返り見て、其の紛亂に驚くのみである。口を開いて眞實を語らうとすれば、たゞ此の紛然たる心内の光景を、ありのまゝに告白する外はない。其の以上の凡ての思想は我れといふ眞骨髄に徹するには隔りのあるもの、我れの一部には違ひないが、隙のある我れである。充實した我れはたゞ懷疑、未解決といふ點までだと思ふ。私が他人の説を聞いてあれ迄が眞實權威のある部分で、あれから先は造りものだなど感ずる境目は常に此の點である。高山樗牛の思想は、其の狭義本能の覺醒と共に生ずる心内の矛盾煩悶の告白といふ點までが充實したものと、私を壓して來る。それから先は、日進に行かうが、ニイチエに行かうが、皆彼れ一個の試みであり、假定であるに止まつて、私といふ別個のものから見れば、合理もあり不合理もある一の研究材料たるに過ぎない。若し彼れが是れに解決を

得たと云ふのなら、私は其の部分から先の彼れに疑を挿む。次に綱島梁川の思想は、彼れが其の見神法悦を最後の解決としたに拘らず、あんな風になりたいと努力する人が心内に經驗する個々の閃光を集積したのとして私に力を與へる、けれども之れを統一した見神法悦の解決其物は一篇の詩に過ぎない、尙深く實生活と觸れて行くに従ひ、必ず變じて今一度磊々たる灰色の現實に戻つて來べきものだと思ふ。あれがあのまゝ眞に充實した我れとして永續すべきものではなからうと疑ふ。

其の他多くの思想家が道德を説き人生を説いてゐるのを聞くと、其の骨折には尊敬を拂ふし、結論も参考として無用だとは言はぬが、惜しいことには其の解決以前の心内の實光景たる疑惑状態を傳へる聲が足りない。賽の河原のそれではないが、智慧の塔の積み上げ籠をして居るなどいふ感を抱かせる。畢竟第一歩に充實した現實感の基礎が示してないからである。要するに哲學といふものが現代に於いて眞に生きてもとすれば、それは唯その素材となつた現實感に存するので、組織や結論で私等を動かす力は無い。私は此の意味からして、哲學が、今このまゝでは、人生に對して働いて居る方の量は

頗る疑はしいものだと思ふ。

近頃世に唱へられるゼームス、シラー等諸家のプラグマチズムの思想の如きは、最も巧に此の活きた現實と纏貼して立たんとする哲學である。従つて若し茲で一つ最も自分に近い哲學を選び出せといはれれば、今のところ此の思想を擧げる外はないと思ふが、それすら私は其の懐疑に立脚して、それから多く離れまいとする所に生命を感じるのであつて、若しあれが究極の解決だと言はれると、首を傾げざるを得ない。實際我々は唯自分々々の實生活に都合のよいやう、其時々々に適應する經驗の整理統一をやつてゐる。事實はプラグマチストの言ふ通りである。之を外にして何の哲學も成立つ譯はない。併し之れだけで凡てだとは何うしても言へない。問題は實に是らから先にある。實生活に都合なやうに統一すると、一口に言つて了へば何でもないが、事實其の統一が満足に行はれてゐるか否かといふことが第一問題である。勿論何うにか斯うにかやつてはゐる。其の人の其の時の境遇事情で満足は満足なり、不満足は不満足なりと否應なしやつて行く。併し大體の傾向から言つて、進んだ複雑な思想の人ほど不満足の統一に陥り行く趣のあるのが、見逃す

べからざる悲しい人生の事實である。過去の生活に對する悔恨反省、それから將來の生活に對する不安、心配、是れらが丸で人生に無いものなら、プラグマチズムの命題は十分の權威を以て我々を支配しやうが、事實は其の反對である。昨日の行爲といふのが實は不満足な、仕方なしの一時凌であつた、結果は觀面今日に色々苦痛を残す。悔恨の傷が胸から消えない。是れでは明日からの生活が心元ない。時の宜しきに從ふなどと氣なことは言つて居られない。此の、將來に對する不安が當然要求して來るものは統一の標準である。何とかして間違ひつこない目安が立ちはずまいか。此の氣持で人生を回顧思量する、所謂第一義を思ふ心である。是れは實に已み難い自然の事實だ。プラグマチストといへども、之れを消して了ふ力はない。然るにプラグマチズムが其まゝ、解決哲學にされて、人生觀論にまで來ると、此の要求を事もなげに無駄だと打ち消さざるを得なくなる。但しプラグマチストが此の場合に提出すべき言葉は別にある、即ち生活の爲に都合よくといふ。けれども實は生だの生活だのといふ言葉が本來詩であり謎であつて、中身は充實してゐるながら定義の下せないものだ。分つたやう

で分らない、言はゞ哲學も宗教も文藝も此の一應案の解答を得んが爲に存在してゐると言つてもよい程な言葉である。さうであればこそ、其の中に矛盾があつたり、衝突があつたりして之れを標準とする限り無統一無解決の不安が消えなかつたのだ。實生活の爲といふのは、實は一つの逃口上乃至は詩として据ゑて置くべく、哲學として知識の手をば觸るべからざる言葉である。それを哲學上の標準論に何度持つて來てもトートロジーに過ぎない。要するに生活の雑多な矛盾、それを過去現在未來の時にかけて何ら統一するか、これが根本の問題で、プラグマチズムではそれが解けて居ない。居ない所に生命があつて、解いたとする所には空な聲がある。

宗教に對しても同じ事が云へる。(六月の「太陽」に「宗教の三分化と文藝」と題する文を載せた、讀まれた譯者は、此の點に參考を乞ふ)信仰といふ言葉が祕傳めいたものにされ過ぎて、人間の活きた血と遠ざかるにつれ、今では信仰よりも寧ろ疑惑の方が宗教の味になつては居ないか。茲で私は宗教の味といふ、宗教の全部とは言はない。けれども兎に角宗教が現代のものとして生きた温い息を呼吸して居ると見える

のは、此部分だけである。青年などの、本當に深い眞面目で宗教を語つてゐるのを聞くと、其の普通生活に統一を失つて、神に據り處を求めようとする、痛切熱心な祈願の一面が惻々として人を動かすことにはある。言ひ換へれば、彼等の懐疑の悶えが宗教的に現はれてゐる間は眞實の味が減る。けれども一歩して其の求める所の神を得たと號し、悟り顔をして、信仰の隠れ家に澄し込むに至れば、もう其の言説は洞々として空なものになつて了ふ。信仰を説かないで懐疑を説き、安心を説かないで煩悶を説かない間が依然として現代宗教の味である。跡は私等の精神生活と殆ど全く没交渉と言つてよい。

下 文藝と第一義生活

今の私に取つては、宗教でも哲學でも生きた血の通つてゐるのは其の懐疑の方面ばかりだと思ふ。併し懐疑は何時でも終點を意味するものでないから、之れに住する限り、必ず何等かの形、何等かの程度で終點を知らうとする努力若しくは要望が残る。其の實終點は恐らく知れないものであらうとは今までの経験が教へる所であるが、それにも拘はらずそれを知ら

う知らうとあせる氣持は、古今を通じて少くも減じない。又あせらざるを得ない事情が人世の根本に横はつて居る。知れないものを知らうとする、此のパラドックスがやがて造化の神秘的なものであらう。近代の經驗派の諸哲學は、成るだけ此のパラドックスに手を附けまいとする。けれども手を附けないことが其れを無くすることにはならないで、パラドックスは依然としてパラドックスのまま人世に生きて残る。第一義欲は消し難い我々の眞實であつて、決して夢では無い。哲學も宗教も此の軸の引力に吸ひ寄せられて、周囲を回轉してゐるものに似ならぬ。

日常の第二義生活は何うにかして果して行く。併し同時に其の不満足を意識して、絶えず一層圓滿な第二義生活に入りたいと焦躁する必然の行當りとして、第一義の最勝道に頭を回らす、其の第一義の主觀にあると、客觀にあると、具象であると判象であると、乃至それが掴み得られると得られないとは關する所でない。得られないと聞いたからとて休められる道ではない。そして此の一念を何うにか心の中で取扱ふ所に人間の第一義生活若しくは精神生活の中樞が存する。

此の第一義生活の、最も著しい發現であり、また刺戟であるものは哲學、宗教、それに加へて文藝がある。そして少くとも現在の哲學なり宗教なりは、僅に上に言つたやうな部分のみ私の第一義生活に觸着する。それでは哲學の哲學たり、宗教の宗教たる本領からは外れたものになる。これを一言で言へば現實の觀照即ち文藝的だ。哲學の文藝化、宗教の文藝化、私には斯う名づけたい現象である。

そこで本論の終結に近づかうと思ふが、哲學、宗教、文藝の三姉妹を併せ觀て、現代に最も生きてゐるものは文藝だと考へることを禁じ得ない。最良日と言ふ人は言へ、事實私の第一義生活に全力を擧げて刺戟を送るものは文藝である。固より深淺強弱はさまざまであるが、兎も角も全機能を働かせて第一義生活に廻るの使命を果しつゝあるものは文藝だとかしか思へない。現實の人生を與へて切に第一義を想はせる。唯想はせるが故に、宗教でもなければ哲學でもなく、轟然として文藝である。或は今が文藝の時代であつて、哲學の時代でも宗教の時代でもないのか、或は哲學宗教は已か難い現代の要求であつても、それが一たび文藝に立ち戻つて出直すべき運命に際してゐることを暗示する

のか、何れにしても現代に於ける文藝の地位は哲學宗教よりも意義の多いものと感ずる。私の第一義生活は、深かれ浅かれ、文藝によつて最も多く満足させられる。同時に今後の哲學たり宗教たるものを何うて貰ふことかと思ふ。

終りに、私が文藝に縁の近い事を職業として居るのは、決して文藝に後のやうな讃仰の意味があるからではない。之れに携はつたのは唯私の性質や境遇が然らしめたのである。初めから文藝にそんな意味があるのを見抜いて、それに従事したなどといふ譯でないことを斷つて置く。

(明治四十二年九月)

二途

言葉は最も具體的なものか最も抽象的なものか最もおもしろい。中間のものは總てだれる。

藝術はこの二つの言葉の何れかを求めようとしてゐる。

眞理は最も個々のものか最も統一したものか最も改しい。哲學はこの二様の眞理の何れかを假定して立

たらとする。

(題言より)

田舎の友人

君、田舎に老い行く寂しきはもつともの事ながら、せめて斯う思ひ直して見給へ。我等都會に住むものは、却つて都會の眞の生活を楽しむことの出来ないものである。それに對する感受神經が鈍くなつてゐる。また家庭がここにあり、職業がそこにあつて見ると、それらの周囲が到底自由な夢の世界には入ることを許さない。また旅の心で人生を味ふ、あの甘い淋しきは都會の常住者には得られない。また、即いてゐては都會も散文的になつて了ふ。離れて理想化してゐればこそ、詩的である。

身は田舎にゐて都會にあこがれる心を失はない人、そんな人が年に一度か二度つづ都會に出て、其の濁いた心と新鮮な感受性で、心ゆくまで、都會生活の杯を吸ひ乾してゆく。家と職業との散文から去つて、都會の旅の詩に這入る。田舎にゐる君等こそ、まこと都會の生活を餓ゑたるもの如く味ひ得る幸福な人である。

(題言より)